

# マリア

2007(平成19)年10月1日鑑賞<試写会・朝日生命ホール>

★★★★



監督・製作総指揮＝キャサリン・ハードウィック／出演＝ケイシャ・キャッスル＝ヒューズ／オスカー・アイザック／ショーン・トープ／ヒアム・アッバス／ナディム・サワラ／エリック・エブアニー／ステファン・カリファ／スタンリー・タウンゼント／ショーレ・アグダシュル／キアラン・ハインズ（エイベックス・エンタテインメント配給／2006年アメリカ映画／100分）

……「受胎告知」に始まり、ナザレからベツレヘムまでの苦難の旅、そして馬小屋におけるイエス・キリストの誕生という壮大な物語は、キリスト教信者でなくても興味深いもの。『パッション』（04年）には驚かされたが、『マリア』はお勉強のネタにピッタリで、時代背景を含め、あなたの頭はスッキリと整理できるはず。そこでさらに一歩進めて、今年のクリスマスは飲み食いを控え、この映画で学んだことを家族で話し合うゼミナールの場としてみれば……。

## あれから3年……

イエス・キリストの「受難」を生々しくスクリーン上に描いた、メル・ギブソン監督の『パッション』（04年）は全世界に大きな衝撃を与えた。私も途中思わず涙があふれることをおさえることができなかったほど、とにかくすごい映画だった（『シネマルーム4』261頁参照）。

あれから3年。今度は女性監督であるキャサリン・ハードウィックがやさしい女性の視線から、史実に忠実に（？）、イエス・キリスト誕生までの感動的な聖母マリアと夫ヨセフの物語をスクリーン上で観せてくれることに……。

## イメージが大切、だから……

絵画の世界ではエル・グレコの「受胎告知」が有名だが、そもそも医学的、生物学

的に処女受胎などありえないことは当然。現にこの映画では、純潔を守るべき娘が妊娠したことによって、村人たちから非難され、石で打たれようとするシーンが登場するが……。

他方、「受胎告知」のイメージどおり、聖母マリアは処女だから、そのイメージはあくまで清純でなければならないのは当然。

日本では、たとえ俳優が演じるとはいえ、あらひとがみ現人神である天皇陛下を演ずる俳優の顔を直接スクリーン上に登場させるについては、当初かなりの抵抗があったよう……？ 現に『明治天皇と日露大戦争』（57年）で嵐寛寿郎が明治天皇を演じるについては、かなりの議論があったと私は聞いているが……？

それと同じように、いやそれ以上に、イエス・キリストや聖母マリアの顔をスクリーン上に登場させるのは大変。なぜならそれは、キリスト教信者はもちろん、全世界の人々が持っているイエス・キリストや聖母マリアのイメージに合致するものでなければならないから。

私が中学生の時に観た『キング・オブ・キングス』（61年）は、まさにそういう議論を経て誕生した大作で、多分これがイエス・キリストの顔をスクリーン上で直接観客に観せた最初の映画……？ そんな観点から考えると、『パッション』でイエス・キリストを演じたジム・カヴィーゼルも大変だっただろうが、『マリア』で聖母マリアを演じるケイシャ・キャッスル＝ヒューズも大変……。

## あれから5年……

マリア役を射とめるのは誰……？ まず最初に私はそんな興味を持っていたが、キャサリン・ハードウィック監督が選んだのは『クジラの島の少女』（02年）に主演した女優ケイシャ・キャッスル＝ヒューズ。彼女が生まれたのは1990年だから、『クジラの島の少女』への出演は12歳の時であり、この『マリア』への出演は17歳。したがって、まず第1に処女受胎した聖母マリアにふさわしい清純さはバッチリ。

ケイシャ・キャッスル＝ヒューズはニュージーランド生まれのマオリ族の女性。つまり、『クジラの島の少女』はニュージーランドのマオリ族の神話を基にした心温まる奇跡の物語だったから、1万人の中から抜擢された女の子がケイシャ・キャッスル＝ヒューズだったというのは実によくできた話……。私が『クジラの島の少女』を観ようと思ったきっかけは、新聞やポスターの宣伝に使われていた少女の写真。つまり、

「意思力の強さ」が「目の強さ」にあらわれている女優ケイシャ・キャッスル＝ヒューズのポスターを見たためだ（『シネマルーム3』154頁参照）。

彼女はこの『クジラの島の少女』で見事にアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたが、あれから5年……。彼女は今や、ニュージーランドのマオリ族の少女ではなく、全世界の人々から聖母マリア様としてスクリーン上で見つめられるまでに大成したことになる。もっとも彼女は、既に『スターウォーズ エピソード3 シスの復讐』（05年）のクイーン・アパイラナ役で起用されていたが、残念ながらこの映画での印象度はイマイチで、私は紅一点としてナタリー・ポートマンだけを挙げていた（『シネマルーム8』121頁参照）。

しかし、ジョージ・ルーカス監督が15歳の少女ケイシャ・キャッスル＝ヒューズを起用したことからわかるとおり、ハリウッド女優とはちょっと雰囲気が違う美貌はもちろん、その演技力は抜群で、とても17歳とは思えないもの。オーストラリア生まれの大女優ニコール・キッドマンやナオミ・ワッツが今後下り坂に向かっていくことが避けられない(?)中、これからのニュージーランドの輝ける星として成長してもらいたいものだ。

## やはり視覚効果はすごい！

私は、幼稚園時代に絵本などで聖母マリアやキリストの物語に馴染んでいた。また、中学・高校は中高一貫の男子進学校ながら、カソリック系の学校だったから、神父サマの授業があったり、宗教画を描く油絵の授業もあった。中学時代に描いた、磔刑にされたキリストの油絵は、今でも事務所のロッカーの中にしまっている私なりの傑作……？

したがって、私の頭の中には、有名な「最後の晚餐」の絵はもちろん、「キリスト降誕」「東方三博士の礼拝」「キリストの磔刑」「キリストの復活」などの有名な絵はしっかりとイメージされている。そして、この映画でスクリーン上に登場するあのシーンこのシーンは、頭の中にあるイメージとまったく同じ。やはり視覚効果はすごいことを実感！

## 2008年前の生活が目の前に……

今、私たちが生きている紀元2007年は言うまでもなく、イエス・キリスト誕生後

2007年目という意味。ところで2007年前の日本がどんな状態だったかということ、実はその存在すらなかった時代……。

しかし、それと同じ時代に、マリアの父ヨアキム（シヨーン・トーブ）、母アンナ（ヒアム・アッバス）や秘かにマリアを思っている働き者のヨセフ（オスカー・アイザック）らが生活しているナザレの村では、田を耕し、ワインやチーズを作っていたのだからすごい。そして、またイエス・キリスト誕生前後の時代は、ローマ帝国とエジプト王国すなわちシーザーとクレオパトラの時代……。

ナザレやエルサレム、ベツレヘムという地名は、イエス・キリストの物語によって有名になったものだが、当時これらの村のあるパレスチナ（地方）を支配していたのは、ローマ元老院から「ユダヤ王」の称号と地位を与えられていたヘロデ王。彼はローマ帝国の助けを借りてエルサレムを征服し、王制を敷いていたが、それはあくまでローマ帝国の後ろ楯のおかげ。したがって、ユダヤ人はヘロデ王の圧制とそのバックにあるローマ帝国の圧力から人々を解放してくれる救世主（メシア）の出現を待望していたわけだ。

そんなイエス・キリスト誕生にまつわる歴史的背景と、イエス・キリストの全生涯を最もダイナミックにそして聖書に忠実に描いた映画が『キング・オブ・キングス』だが、イエス・キリストの活動ぶりは、『ベン・ハー』（59年）や『スパルタカス』（60年）などの活劇大スペクタクル娯楽映画からも明らかだった。そして、イエス・キリスト生誕1年前の状況は、まさにこの『マリア』でバッチリ。

イエス・キリスト誕生の1年前、すなわち今から2008年前のナザレの村における人々の生活ぶりやヘロデ王の圧政ぶりという歴史的事実が、この映画によってあなたの目の前にくっきりと浮かび上がってくるはず……。

## 4つの福音書のうち……？

今日の『マリア』の試写会の観客には、マスコミ関係者以外にキリスト教関係者がたくさんいたが、彼らは旧約聖書と新約聖書を熟読しているはず。私は『パッション』の評論でも、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという4つの福音書のことを、「そこに書かれてある基本的な事実関係は、共通しているものの、その記述には多くの差異がある。それは、4人の体験したことの違いや、見解の相違があるのだから当然のこと」と書いた（『シネマルーム4』264頁参照）が、その相違点はイエス・キリスト



誕生の物語についても同じ。すなわち、マタイの福音書とルカの福音書にはその物語が詳しく書かれているが、マルコの福音書とヨハネの福音書はその点の記述は簡単で、その記述はイエス・キリストが公の活動を開始してからのものになっているらしい。私はそれらをきちんと読んでいないが、読み物としても面白いことはまちがいないから、弁護士としての第一線の仕事を退くことになれば、是非読んでみたいもの。



© MMVI NEW LINE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

そして、『パッション』の評論でも書いたが、私としてはイエス・キリストの受難の物語を歴史的事実だと考えているのと同じように、聖母マリアによるイエス・キリスト誕生の物語は歴史的事実だと考えていることを、ここに明記しておこう。

### 将を射んと欲すれば……

男が女に求婚するスタイルは、2000年前も、『屋根の上のバイオリン弾き』（71年）の時代も、そして現在も基本的にあまり変わっていないようで、求婚する男はまず娘の父親の許可をもらうのが原則。ヘロデ王からの厳しい税金の取り立てによって娘を連れていかれる男がいる中、ヨセフは村の中ではかなりのしっかり者のようで、ロバを連れていかれそうになったマリアの父ヨアキムに対してロバを取り戻してやる余裕も。

そんなヨセフは、マリアに求婚するについては「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」の鉄則どおり、父親ヨアキムに結婚の許しを。その結果、ヨアキムがマリアに一言の相談もないままヨセフを結婚相手に決めたのは、今なら父親の横暴だが、当時はそれが常識。したがって、ヨセフに対して何の愛情も持っていないマリアは不安だらけだったが、それは仕方なし……？

### 天使ガブリエルはこんな姿……？

聖書に登場する天使ガブリエルは、宗教画にも映画にもよく登場するが、そのイメ

ージは人それぞれ……？ だって、ホントにそれを見た人は2008年前の MARIA をはじめ、ごくわずかしかないのだから。

ヨセフとの結婚を命じられた MARIA が逃げ込んだオリーブの木の下に登場したのが天使ガブリエル。ここで MARIA は「あなたは神から選ばれ、神の子を身ごもる。子供はイエスと名づけられ、いと高き方と呼ばれる」と告げられた。また、同時にガブリエルは MARIA に対して、その子供は MARIA の親戚である敬虔な聖職者ザカリヤ（スタンリー・タウンゼント）とその妻エリサベト（ショーレ・アグダシュルー）との間に生まれる男の子ヨハネによって洗礼を受けるだろうとも……。

ところが実は神のお告げは、MARIA よりも先にザカリヤに伝えられていた。すなわち、それは「汝の妻は汝の息子を身ごもり、神のために道を整える預言者となるであろう」というもの。ザカリヤの妻エリサベトは妊娠できる年齢をとうに過ぎていたため、ザカリヤがそんな弁解をしようとしたところ、それに対する神サマの答えは、「そんな口ごたえをしていると、喋れなくなってしまふぞ！」という手厳しいもの……？

MARIA が天使ガブリエルのお告げに困惑したのは当然だったが、同時に MARIA がエリサベトの妊娠を確認しようとしたのも当然。そこで、収穫期までには必ず戻ると両親に約束して、ザカリヤとエリサベトのもとを訪れた MARIA は、そこでエリサベトの妊娠を見て大きな安心を……。

## 両親とヨセフの怒りは……？

性徳が乱れに乱れている現在でも、10代の娘からいきなり「妊娠した」と告げられたら両親は嘆き、娘に対して怒りをぶつけるはず。したがって、2008年前のナザレでは、その怒りが数十倍だったのは当然。

また、お腹を大きくしてナザレに戻ってきた MARIA に対して、村人たちの非難が集中したうえ、ヨセフとの関係が微妙になってきたのも当然。そりゃヨセフにしてみれば、婚約が成立した後、1年間は子供のできる行為はしないと約束させられているのに、久しぶりに帰ってきた婚約者のお腹が大きくなっていたのでは、やっつけられないのは当然。

そこで再び登場したのが天使ガブリエル。夢の中に登場したガブリエルから、すべての真実を聞かされたヨセフは、翌日「君は僕の妻だ。僕は君の夫だ」と宣言するこ

とに。こうなりゃ強いもの。周りの誰が何を言おうとも、マリアを守っていくと決意したヨセフの顔は自信に満ちあふれたものに……。また、そんなヨセフを見て、マリアも「ヨセフはいい男。そして強い男」と母親が断定していたことを思い出し、あらためてそう強く確信することに……。

## なぜ、ナザレからベツレヘムの旅へ……？

日本の封建時代、農民を核とする被支配者階級は、すべて領主の管理下に置かれていたから、彼らが移動することは厳禁とされていた。2008年前のエルサレムもそんな社会構造だったことが、この映画を観ているとよくわかる。

ある日、ローマから布告が下り、ヘロデ王の名において、ナザレの村にも人口調査の命令が下された。これは、つまり住民票（住民基本台帳）のとおり、それぞれの生まれ故郷に戻り、住民票とその存在を確認せよ、という命令だ。これは裏返せば、それまでユダヤの民はある程度、村から村への移動が自由だったということだが、この命令によって、今、ナザレで生活しているヨセフは、ナザレ生まれのマリアの父ヨアキムやアンナと別れて、生まれ故郷のベツレヘムに戻らざるをえなくなることに。この映画のメインとして描かれるヨセフと、お腹が大きくなり近々臨月を迎えそうなマリアの、ナザレからベツレヘムへの苦難の旅は、こんな事情によって始まったわけだ。

幼稚園の時からイエス・キリストの物語に親しんできた私も、さすがにここまでは知らなかったナァ……。

## 当時ペルシャはすごい文明国

イエス・キリスト誕生の物語で、イエス・キリストが神の子であることを公証するのに大きな役割を果たすのが、東方の国ペルシャからエルサレムにやってきた、いわば目撃証人とも言うべき3人の男たち。すなわち学者のメルキオール（ナディム・サワラ）、懐疑的な通詞ガスパール（ステファン・カリファ）、エチオピア人の天文学者バルタザール（エリック・エブアニー）の三博士だ。スクリーン上で観る三博士の占星術を始めとする博識ぶりはすばらしいもので、当時ペルシャがすごい文明国であったことがよくわかる。

三博士が「救い主」誕生を予測したのは、古文書の研究と星の研究から、3つの惑星が並ぶ瞬間がくることを発見したため。そこで彼らが下した決断は、その星を追っ

て、ペルシャからエルサレムまでの壮大な旅を執行すること。車や列車があればそんな旅はすぐだが、ヨセフとマリアがナザレからベツレヘムまで命がけの旅をしたのと同じように、老齢の三博士にとって、この旅は大変。懐疑的な通詞ガスパールは、当初「俺は嫌だね」とツアーへの参加を拒否したが、結局は……？

ラクダに乗った200日を超える長旅の果てに、三博士がベツレヘムの馬小屋で見たものは……？ そりゃ長旅の苦勞があったというもの。これによってイエス・キリストの名はもちろん、三博士の名も永久に語り継がれるようになったのだから……。

### 三博士にも大チョンボが……？

以上が三博士たちの歴史に残る功績だが、この映画を観ていると、そんな立派な三博士たちにも大チョンボがあったことがよくわかる。

ロバ1頭を大切に引きながら、食べるものにもコト欠き、やっとナザレからエルサレムにたどり着いたヨセフとマリア夫妻とは大きく異なり、ペルシャからはるばるエルサレムまでやってきた三博士は、格調高いシルクのローブと装飾が施されたラクダにいっぱい荷物載せた旅だったから、目立ったのは当然。そこで悪知恵の働くヘロデ王が思いついたのは、なぜ三博士がペルシャからエルサレムまで旅をしているのかについて事情聴取すれば、ユダヤの民が求めている救世主についてのヒントが得られるはずだということ。

そんな場合、有効な手段は、2008年前も現在も同じで、酒、料理、女で接待して、その本音を聞き出すこと……？ 長い旅が200日を超え、すっかり疲れ果てている三博士は、そんなヘロデ王の狙いにまんまとはまり、飲食による接待攻勢の中、救世主がこれから生まれてくる幼な子であることを易々と自白してしまったから、こりゃ結果的にみれば大チョンボ。だって、三博士からそんな情報提供を受けるまで、ヘロデ王は、救世主は人々の中にいるそれなりのリーダーシップをもった成人の男だと信じ込んでいたのだから……。そのうえ、ご丁寧にも、三博士はユダヤの民が待望する救世主が誕生すれば、それをヘロデ王に報告するとまで約束してしまったが……？

### あの有名な物語とシーンが冒頭とラストに……

ヘロデ王は暴君。そんな評価が歴史的事実として正しいのかどうかは別として、ヘロデ王が「ベツレヘムで生まれた2歳以下の男子を皆殺しにせよ」と命じ、それを実

裁判員制度の実施を  
 間近に控えて、わたし  
 は不安がいっぱい。欧  
 米と日本の裁判制度が  
 根本的に異なるのは、  
 キリスト教における  
 「最後の審判」、すな  
 わち神による最後の裁  
 きの有無。誤解を恐れ  
 ず言え、欧米は人間  
 の判断には誤りがある  
 ことを大前提とした裁  
 判制度だが、日本では  
 裁判官(員)は「絶対  
 正しい判断を下す」と  
 考えられているから大  
 変。このようにキリス  
 ト教の本質の理解に縁  
 遠い日本だが、平和で

行したことは歴史的な事実。  
 これは、ヘロデ王は一方で  
 は自分はユダヤを支配してい  
 る王だと信じながらも、実は  
 ユダヤの民の間に自然に広が  
 っている救世主待望論に怯え  
 ていたことを証明するもの。  
 この映画では、まず冒頭にヘ  
 ロデ王のそんな命令によって  
 次々と虐殺されていく幼な子  
 たちの姿が映し出されるが、  
 この時点では私たち観客は、  
 なぜヘロデ王がそんな残虐な  
 命令を下したのかよくわから  
 ないため、オロオロするばかり  
 ……?

しかし、ラストにも再度そ  
 んなシーンが登場するから、  
 そこではなぜヘロデ王がそん  
 な命令を下したのかについて  
 は十分納得……? そこで、  
 私たちの関心は、当然生まれ  
 たばかりのイエス・キリスト  
 を胸に抱いたマリアとそれを  
 やさしく見守るヨセフの動向  
 だが、さて、ベツレヘムの馬  
 小屋で誕生したばかりのイエ  
 ス・キリストの運命は……?  
 2007(平成19)年10月6日記



## マリア

あすからテアトル梅田ほかで公開



©MMVI NEW LINE PRODUCTIONS, INC. A  
 LL RIGHTS RESERVED.

# クリスマスはマリア様の勉強を!

豊かな昭和の時代を  
 受してきたためか、ク  
 リスマスのイベントだ  
 けは定着している。  
 聖書を讀まない日本  
 人がイエス・キリスト  
 の物語を知るのは、受  
 胎告知、「東方三博士  
 の礼拝」「最後の晚餐」  
 「キリストの磔刑」キ  
 リストの復活」等の有  
 名な絵画から。また昔  
 は「ペン・ハー」(一  
 九五九年)、『スバル  
 タカス』(六〇年)、  
 『キング・オブ・キン  
 グ』(六四四年)にシ  
 ーが死亡した後のロ  
 ーマ帝国の時代に、ベ  
 ツレヘムの馬小屋の中  
 グス(六一年)など、  
 キリストが登場する多  
 くの名作から彼の生き  
 ざまを学んだもの。  
 現在は娯楽性と収益  
 性を重視の結果、ド派  
 手なシリーズものばかり  
 のハリウッドだが、三  
 年前に全世界に衝撃を  
 与えた『パッション』  
 騒ぎ、恋人食事をた  
 めの目ではなく、二〇  
 〇七年前の「あの日」  
 を思い出すためのも  
 の。  
 今年はそんな原点に  
 戻って、『マリア』か  
 らキリスト誕生の物語  
 を学んでみては。

大阪日日新聞2007(平成19)年12月7日